

# お遍路がもたらす過去の経験の宗教的意味

～お遍路経験者から分かること～

1190513 中山 大翼

高知工科大学経済・マネジメント学群

## 1. 概要

現在、お遍路は数多くの人に知られており、日本全国や海外からも巡拝者が来ている。そのお遍路をしている人が、宗教的体験をするという事例がある。

宗教的体験をした人の多くはお遍路の期間であると考えられる。要するにお寺でお経を読んでいる時や、お寺とお寺の移動中であつたりとさまざまである。

今回、本研究ではお遍路経験者にインタビューを行い、お遍路をすることにより過去に経験した意味合いを変えることがあり得るのか調査した。

## 2. 背景

お遍路の始まりとしては、衛門三郎という人物が四国で修行していた弘法大師の後を追ったという説や高弟が弘法大師の入定後、師の足跡を遍歴したのが始まりとされる説があるが、はっきりしたことは分かっていない。

平安時代から安土桃山時代にかけて、四国遍路に出かけたのは主に修行者で、一般の人の巡礼が目立つようになったのは江戸時代になってからという。高野山の僧である真念が執筆した四国遍路のガイドブック『四国辺路道指南』が、お遍路の大衆化へ導いたようである。

近代では交通機関が発達したことにより、信仰心による修行の巡礼から、観光という遍路の新しい一面が生まれている。

そして現在、巡礼者の世代は幅広くなり、先祖供養や家族の健康祈願、自分探しのためと、その目的もさまざまになっている。

お遍路経験者が道中で宗教的体験をしたことと、ありふれた道中の一地点が、聖地化されている可能性があることを浅川泰宏(2008)は述べている。〈歩き遍路における意識の変化と宗教的次元〉(第十部会、(特集)第六十六回学術大会紀要)浅川泰宏 2008年81巻4号p1232-1233) なお、浅川泰宏(2008)は、お遍路そのものが、宗教的体験となる事例を扱っているが、お遍路によってそれにより昔の経験が宗教

的意味を持つことがあり得るのではないかと。



図1

## 3. 研究目的

お遍路をすることが、それより昔の経験に対して宗教的意味をもたらすことがあるのか、インタビューを行いその内容を整理していく。

## 4. インタビュー調査方法

本学地域連携棟の方に協力してもらい、「一般社会人被験者プール」データベースに登録されている50歳から70歳(約200人)にメールで募集を呼びかけた。一週間を締め切りとし、5件の返信が来た。後に応募者と詳しい日付をメールでやり取りした。条件を「四国八十八箇所霊場を合計十箇所以上巡拝経験のある方」とした。

※場所は全て本学永国寺キャンパスで実施。

## 5. インタビュー調査結果

### Aさんのお遍路

2017年11月10日(金)13~15時(インタビュー時間1時間48分)

音声データあり

聞き手:中山大翼、Y氏

Aさんは旅行会社に勤務しており、62歳で退職した。その後66歳までの4年間他の仕事に就き、退職した後に八十八箇所を回られている。お遍路に行くきっかけは20歳の頃、旅行会社での仕事の請け負いも

兼ねて遍路の代行（お手伝い）を一か月間していた。代行経験を経て今度は自分のために回りたいという考えとともに、四国で育った以上、また四国といえば八十八箇所というイメージがあり、使命感みたいなものがあつたためである。

Aさんは67歳で八十八箇所を始めて回る際に、丁度先輩と高知県の四区間だけ一緒に回った。その先輩は、お遍路を3回経験しており今回で4回目であった。お遍路が初めてだったAさんは、4回も行くことに疑問を感じ先輩に「なぜ4回も回るのか」と尋ねたところ、先輩は「弘法大師様が（自分を）呼んでいる」と返答した。当時のAさんは、そんなものか（他人事）という感覚しかなかったという。

聞き手：その弘法大師様が呼んでいるというような言われ方をされた

時のAさんのお気持ちはどのようなものでしたか？

Aさん：ハハハ、いや、まだ僕は呼んでもらったことが無いので、あつそんなもんかというような感覚ですかね。

聞き手：なるほど、その「弘法大師様が呼んでいる」という友人の言葉に対して、どういう返事をされたのか覚えていますか？

Aさん：う〜ん、そんなもんですかね.. みたいなことだっと思えます。

聞き手：あ〜。

Aさん：ま〜（5秒間沈黙）同じような経験が僕にもありまして、そのお寺じゃなくて、昔、高等学校の事故があつて、だいたい（生徒）が亡くなったんですよ、28人。

これは旅行会社で働いていた時のエピソードである。Aさんが42歳の時、旅行会社の社員として担当していた高知県の高校が、海外の修学旅行中に事故に遭い28人の命が亡くなった。しばらくして、Aさんは県内各地に散在する亡くなられた全ての生徒達のお宅にお参りに行くことになった。幡多から室戸まで、タウンページで探した各地の花屋に電話して花を手配し、それを持って車でご遺族のお宅を順に巡っていく旅であった。

Aさん：ま、不思議な話ですけどその、（生徒の）家分らんじやないですか。住所は分かってますけど。で、ただ、聞いた覚えが無いんですよ.. 例えば『〜さんの家はどこですか』と。要はすつと行けるわけですよ。山奥でも町の中でも。あの感

覚かなという、まあ若干似ているんじゃないかなど。その導かれているのは、そういうことなのかもしれませんけど。

このように当時の心境を語ってくれた。当時はカーナビや携帯電話等の機器が普及しておらず初めて行く場所なのにもかかわらずスムーズに訪問することができた。そして、何かに導かれているような感覚を覚えたのだ。その感覚と先輩の「弘法大師様に呼ばれている」という感覚との類似性に気付いたのは、今回のインタビューにおいてであった。

Aさんにとってのお遍路とは、非常に辛く孤独で無力な遠い昔の経験が実は、弘法大師様に支えられていたのではないのかという宗教的気付きを与えられるという体験である。

## Bさんのお遍路

2017年11月17日（金）13〜14時30分（インタビュー：1時間28分）  
音声データあり

聞き手：中山大翼、Y氏

Bさんの実家は真言宗だがお参りをはじめとする宗教関連のものにあまり重きを置いていないという。またBさんはマラソンをやられていてフルマラソンも走った経験があるという。

お遍路に行くきっかけは奥様が退職し、時間ができたことと健康のため。他に観光をはじめ俳句や短歌、写真も兼ねた趣味のためである。最初は善通寺（七十五番霊場）に夫婦と長男さんの3人で行き、それ以降も少しずつ単発で行くなどしていた。Bさんはマラソンは真剣にやるグループでお遍路はやや後方の位置付けと理解している。他のお遍路さんを見て偉い、尊敬するとは思いますが、お遍路は普通の生活とはあまり馴染みがないとしている。だが、大事な方を亡くされたり、いわゆる不幸な方も必ずしも宗教的なバックグラウンドがあるというわけではなく、自分の心の拠り所を求めてお遍路をしているとBさんは理解している。

## Cさん夫婦のお遍路

2017年11月21日（火）13時〜15時（インタビュー：1時間43分）  
音声データあり

聞き手：中山大翼、Y氏

Cさん夫婦は旦那さんの実家が真言宗で、親からよく「弘法大師様がいる、弘法大師様に〜」とよく教わつたという。

お遍路に行くきっかけは旦那さんの母親が自分では回れないからその代わりに頼まれて回った。その後は旦那さんが退職して時間もでき、退職するまでに何も起こらず健康で働けたことに対するお礼を兼ねて回られていて、母親から頼まれて回ったのを含めると2回回っている。

夫婦ともに家の仏壇で手を合わせる時と、八十八箇所のお寺で手を合わせるとでは、全く違う感覚があるという。家族のことだったり一緒にのことはお願いするが、口では表せられない違いが見つかったと夫婦は理解している。お経を読むときは弘法大師様にお礼ではないが、何らかの伝えるものがあるという。それを言うことによって弘法大師様と意思疎通というとおかしいが、何かできるのではないかと感じる感覚が旦那さんにはあるという。一方奥さんはお寺で数分間、無の時間があり気持ちが安定していく・落ち着いてくるという。そして、期待感・不安感などがあるけれども、何となくいけるのではないかと自信が生まれ気持ちが軽くなる感覚があるという。

聞き手：回られている時に、次回行くまでにお寺に。何か生活で挫折だったり、うまくいかないこと、悩み事とかあった時に、こういう悩み事は次回のお寺までに、次回のお寺に行った時に唱えるとかお願いしようというような気持ちっていいのはあった時ありますか？

夫：それはあれその、日にちを変えてということ？

聞き手：あっ、すみません、えっと悩み事とかがあって、じゃあ次のお寺でその悩み事を解消したいなというような気持ちとかは？

夫：あ〜あ〜あ〜。そういうことか。

妻：もしそういうことがあったらね、たぶんもっと早く回るんじゃないかなと思うんですね。

聞き手：あ〜そっか〜。

妻：回ることによって、お寺参りをすることによって気持ちが軽くなっていくんじゃないかなという思いはありますね。もしそういうことがあったら。そういう感覚が八十八箇所を巡ってあったと思いきけどね。だから、だからもしそういうことができた時とか、まあ一番もし主人が先亡くなってとかだつたら回ると思います。

聞き手：あ〜。それは前向きな考えということですか？

妻：そうですね。

他にも、旦那さんがもし先に亡くなられた時は、お遍路をするという。この考え方はBさんの大事な方を亡くされたり、いわゆる不幸な方も必ずしも宗教的なバックグラウンドがあるというわけではなく、自分の心の抛り所を求めてお遍路をしているという考えを象徴するものになっているのではないかと。

## Dさんのお遍路

2017年11月22日(水)13時~15時(インタビュー:1時間46分)

音声データあり

聞き手：中山大翼、Y氏

Dさんは兵庫県出身で結婚と同時に高知に移住した。なぜか20歳の時に無意識に高知に行きたいという思いが強くなったが結婚して高知に来れるとは思ってもいなかったという。またDさんは早くから母親を亡くして近所のおばさんにはよくお世話になっていた。そのおばさんからは真言宗を信仰していたという話を聞いたことがあるという。

お遍路に行くきっかけは四国にいる以上回っておきたいという思いがあったため。その後2回目は高野山開創1200年という記念の年であることと、長年実母のようにお世話になったおばさんからの真言宗の話がずっとDさんの記憶の隅にあったためである。その話を思い出して八十八箇所を回った証の掛け軸や衣をプレゼントすることが最もこれまでの感謝を伝えられるのではないかと考えたためである。

Dさんは宗教的動機から弘法大師様に感謝しながら八十八箇所を回ることによって、お世話になったおばさんに感謝を伝えた。逆に信仰心のない人がお遍路によって信仰心を芽生えさせることをAさんの事例から理解することができる。

## Eさんのお遍路

11月29日(水)13時~14時(1時間00分)

音声データなし

聞き手：中山大翼

Eさんは最初はお試しで霊山寺(一番霊場)から安楽寺(六番霊場)まで回ったという。他にも三重県の伊勢神宮にも行ったことがあり、そこでは空気が変わるような感覚を覚えたという。

お遍路に行くきっかけは、大学の頃、空海（真言宗）に興味がありよく竹林寺（三十一番霊場）と善通寺（七十五番霊場）に行っていてお寺の存在が身近にあったため。また病気が見つかったため、そして四国にいる以上という気持ちがあったためである。

Eさんは写経をしながら回することで、大きな作品を作る感覚があったとしている。また、お寺は伊勢神宮と同じくパワースポットであり、誰でも力をもらうことができるという感覚があるとしている。その感覚は病気を治す上で非常に前向きな力に変わるのではないかと。そして、EさんもBさんの考え方との一致性がみられる。

## 6. 結論

Aさんはお遍路をすることで教わった、過去の経験に宗教的意味を付与することができた。浅川泰宏 (2008) の言う地理的な地点の聖地化というよりは、人生史の一地点での聖地化が行われたということが分かった。

Dさんに関しても、お世話になった人への感謝の気持ちを感じながらお遍路をしているため、Aさんと同様に過去の経験の意味が書き変わった可能性がある。

他3組からは、信仰心はないが困り事があり、願い事をしている時は信仰していると感じたり、お経を読む際に弘法大師と意思疎通ができていくという感覚を持つということが分かった。それはBさんが言う心の拠り所を求めてというのが、共通しているように理解することができる。

このように、Aさんと同様にB、C、D、Eさんも宗教的体験をしているものの、それはお遍路の最中に体験できたものである。

Aさんの知見がB、C、D、Eさんにそのまま当てはまるわけではないが、前者を知ることで後者の理解も促された。

※今回協力していただいた5組の他にもお遍路に行く人は多数いるため私が見つけれなかった事例も多数ある。

## 引用文献

### 【1】

うどん県旅ネット お遍路とは

<https://www.my-kagawa.jp/ohenro/feature/henro/about2>

### 【2】

図1

<https://japaneseclass.jp/trends/about/%E5%9B%9B%E5%9B%BD%E9%81%8D%E8%B7%AF>

## 参考文献

(歩き遍路における意識の変化と宗教的次元 (第十部会、(特集) 第十六回学術大会紀要) 浅川泰宏 2008年81巻4号p1232-1233)